Ⅰ：宗教現象としてのキリスト教

＜前回＞　聖書を読む

１．構成と内容

内容の多様性、正典化（正典化のプロセス＝正統教会・正統教義の形成過程）、キリスト教聖書の言語性

２．二つの読解方法

	聖書とは何か	聖書の言語性	読み方の基本
正典論	宗教書・聖なる書物	神の言葉（神言性）	信仰、霊感
近代聖書学	歴史的文献	人間の言葉（人言性）	理性、一般的な文献読解の方法論を使用

３．キリスト両性論

４．本講義が想定している聖書の読み

聖書の歴史性に注目する読解方法　→　聖書と現代との歴史的距離を意識する。
近代人の日常性・歴史意識における読みを目ざす。

1) 宗教書として成立し伝承され、そのように読まれることが意図されているという歴史的事実を尊重する。
2) 一般的なテキスト解釈学の方法論を採用する。
3) テキストの歴史性／構造性・文学性／思想性に注目する。

５．信仰共同体の文書　→　正典：規範性・権威性（使徒性）、霊感によって成る、聖霊の内的証示、閉じた聖典（増減の禁止）

６．日本基督改革派教会／信条翻訳委員会訳『ウェストミンスター信仰告白』新教新書

７．逐語霊感説　→　啓示即聖書（聖書の文言が実体的自体的に神の言葉）、静的霊感説
動的（dynamic）霊感説：聖書的霊感は、そのつどの受け手（読み手）の状況に応じて、出来事として生じる。

８．聖書は信仰共同体の文書であるが、同時にだれにでもそれなりに理解できる文献でもある。ガンディーが読んだ福音書。

９．近代聖書学成立の歴史的背景＝啓蒙的近代の知的状況

・近代的な歴史意識（歴史主義）→　近代歴史学の成立、文献学的方法論
・新しさの意義、伝統批判、理性の普遍主義

10．キリスト教と近代との関係における二面性

12．近代聖書学は、現代宗教学と同一の源泉から生まれた。

歴史的・批判的方法

テキストの分析・批判　→　類似　→　連関　→　現在の解釈学的中心性
本文批判、歴史批判、思想批判

15．学的な水準での聖書読解の前提としての聖書学。誤読・誤解の排除という意義。

第８講：現代聖書学の動向から

聖書学の最近の動向から、現代聖書学がもたらした成果として注目すべきいくつかのトピックスを紹介する。聖書学とはどのようなものであり、どんな意義を有しているのかについて、理解を深めていただきたい。

１　イスラエル民族の起源

旧約聖書の宗教あるいは宗教思想を考える場合、その担い手である古代イスラエル民族の理解は、重要なポイントとなる。しかし、現代の旧約聖書学では、古代イスラエル民族の起源や実態をめぐって、聖書自体の記述とはかなり異なる研究成果が提出されており、近年の考古学的調査結果を受けて、学説の変化も著しい―日本からも考古学的調査へ参加する研究者は少なくない―。

（１）民族とは何か

１．民族とは何か？

「民族とは何か」という問題はかなりの難問である。従来、民族は血縁関係や地縁関係といった「自然的な繋がり・絆」を基礎とし、あるいはその延長上に成立するというイメージで捉えられてきたように思われる。しかし、人類学的歴史学的な研究に依拠するかぎり、民族を自然的繋がりに単純に還元することはできないことは明白である。例えば、日本人について、大和民族という呼び方がなされるが、大和民族とは、血縁や地縁で説明できるだろうか。いつ大和民族は成立したのか、古代において（あるいは中世においても）、西日本と東日本は、一民族として理解できるのか、などなど、次々難問が生じてくる。

この講義では、現代宗教学の立場から、近年の民族理論の成果を念頭に置きつつ、次のような仮説を提出したい。つまり、

民族＝「ルーツについての物語を共有する集団」＝「血・地＋アルファ（意味･ﾌｨｸｼｮﾝ）」

↓

「民族の成立＝神話の成立」

２．以上のように、民族を神話（民族起源神話）と結びつけて理解しようというのが、本講義の基本的なスタンスであるが、これを理解するには、通俗的な、虚構と現実の二分法といった発想を脱却すること、この二分法の限界を理解することが必要になる。

神話＝虚構、民族＝現実といった見方は、人間の生きた現実を理解する上で限界がある。むしろ、人間的現実は虚構によって構成されていると言わねばならない。

生の事実（解釈や判断をまったく含まない事実そのもの）は、自然物の認識においてすら、成り立たないことは、カントの批判哲学が示した通りである（感性の形式と悟性のカテゴリーなしに、科学的認識は成り立たない。「虹の七色」は生の事実ではない）。まして、人間がシンボルを操る能力によって構築した意味世界はなおさらであり、神話も民族も意味世界内の現実なのである。先の講義で、宗教的現実を宗教言語の第二度の指示対象と説明したのも、同じ論点に関わっている。

Ｑ：民族共同体レベルにおける神話の機能（民族的自己同一性の成立）を、物語論として拡張するとどうなるか。人類全般の自己同一性を可能にする神話は構築可能か？

（２）神話から民族へ

３．神話とは何か？

民族との関係に入る前に、神話についても、最低限の説明を行っておかねばならない。

神話は、儀礼や祭りと同様に、象徴体系の一つであり、形式的には、「象徴機能（媒介機能）を持つ多数の観念が物語形式に結合した象徴体系（象徴連関）」と規定できる。

また内容的には、起源神話（宇宙や万物全体の起源の物語＝宇宙起源神話＝創世神話、民族起源神話、火や言語や農作物、あるいは地名などの起源に関わる文化起源神話など）と神々の神話（神々相互の間の出来事やパンテオン内部の相互関係に関する物語）に大別できる。

４．神話研究の注意点

少なからぬ現代日本人が、神話についての啓蒙的偏見を共有しているように思われる。

その偏見とは、「神話＝虚構」（神話は非科学的であり、子供っぽい迷信である。神話は歴史的事実ではなく、イデオロギー的なでっち上げである）とまとめられる。もちろん、こうした近代的な神話批判は正当な主張を含んでおり、神話研究においても、批判的な方法論は重要である。しかし、批判的な吟味を経ずに、すべての神話を虚構と決めつける態度は、「悪しき偏見」と言わざるを得ない。現代の神話研究は、啓蒙的偏見からも批判的に自由になる必要がある。

５．神話は真理である。

神話は、研究に値する意味を伝達しており、解明すべき内容を有している。この解釈に値する意味内容を神話の真理と呼びたい。本講義では、次の二つが取り上げられる。

①民族にとっての究極的事実・根源的出来事の表現（ルーツの表現）

②人間精神の深層構造の表現

この第８講のテーマは、①の民族起源神話の真理であり、②は次回の第９講で論じる。

「神話が真理を有する」とは、神話に関する宗教研究の前提であり、本講義で聖書は神話であると述べるのは、この意味においてである。

（３）古代イスラエルの民族起源神話

６．旧約聖書の、とくに創世記から出エジプト記に展開される古代イスラエル民族の物語は、民族起源神話の典型であり、そのアウトラインは次の通りである。

アブラハム　→　イサク　→　ヤコブ（＝イスラエル）　→　ヤコブの１２人の息子

アブラハム契約＝民族イスラエルの成立　　ヨセフのエジプト行き

＝ヤハウェ神民族宗教の成立　　イスラエル１２部族

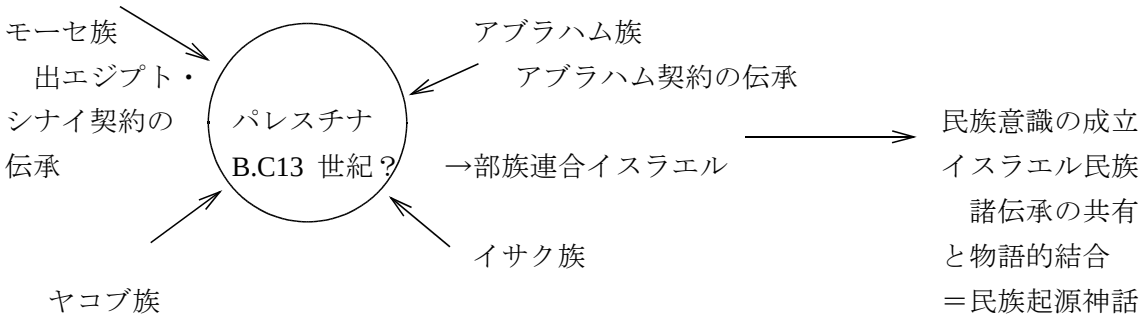
ヤハウェとアブラハムの契約

→　エジプトにおける苦難　→　モーセ

出エジプトと約束の地への帰還（荒れ野の４０年）

７．アブラハム契約と出エジプト（モーセ）は、民族イスラエルのルーツとなる「聖なる出来事」であり、先の講義でヒエロファニーと説明したものに相当する。

８．以上の古代イスラエル民族起源神話の内容に対して、現代聖書学の研究成果から、古代イスラエル民族の成立についての別の歴史像（仮説）を読み取ることができる。



イスラエル民族とは部族的な血縁関係（直接の血縁関係に基づく大家族を核とした共同体）の延長上に成立したのではなく、元来は別々の部族神を信じ、それぞれ固有の神話伝承を有していた諸部族が数百年の相互の関わり合いの中から成立したものである。

９．イスラエル民族の成立についての仮説：「民族の自己同一性と起源神話＝物語」

独立した部族連合体から民族意識（民族的自己同一性）が形成されるには、個別的な諸伝承が結合されて、一つの民族起源神話へと再構成されることが必要である。これは、虚構に基づく一種の飛躍である。

民族の集合的な自己同一性とは、本来多元的なものである。

10.「アブラハムの盾」、「イサクの恐れるもの」、「ヤコブの強きもの」、「主」

→　「アブラハム、イサク、ヤコブの神である主」

諸部族の統合＝イスラエル民族意識の成立は、部族の諸伝承から旧約聖書の伝承（民族起源神話）の成立と同一プロセスを構成すると考えられるが、それは、部族の諸神の名が一つの神名へと統合される点において確認できる。

11. 神はモーセに、「わたしはある、わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあたながたに遣わされたのだと」。神は更に続けてモーセに命じられた。「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名。これこそ世々にわたしの呼び名（出エジプト 3:14f.）

12. 民族起源神話の改訂と聖書的神話形成

古代イスラエル民族起源神話の成立について、その学説は現在も動きつつある（たとえば、この起源神話が最終的な形態に到達した時期がバビロン捕囚の以前か以後か、起源神話には契約伝承がはじめから含まれていたのか、など）。しかし現時点において、本講義で示した仮説の大枠は、かなりの蓋然性があるものと思われる。

こうして成立した古代イスラエル民族起源神話であるが、その後のイスラエル民族の歴史の中で改訂され、そして大規模な改訂を受けることによって、キリスト教起源神話

の成立へと至る。こうしたプロセスは、共同体の自己同一性を支える共通意識の成立が、起源神話の形成と不可分であることの例証に他ならない。

Q：民族の成立＝神話の成立という図式を、古代日本に適応するとどうなるか。

（4）応用問題―アメリカの市民宗教と起源神話―

13. 宗教大国アメリカの秘密

現代のアメリカは、経済的政治的、そして軍事的な大国であるだけでなく、実は宗教大国である。また、多人種国家アメリカでは、民族意識に相当するアメリカ人意識が相当の範囲で自覚的に公有されており、その点では、単一民族神話がいまだに生きている日本以上とも思われる。

Q：日本とアメリカで、愛国心の度合いを比較するとどうなるか。そもそも愛国心などを、いかに比較するのか。

14. アメリカの市民宗教　→　多元的国家アメリカの統合の基盤

民族的あるいは人種的な多元性によって特徴付けられるアメリカにおいて、国民としての自己同一性が共有されるということは、決して自明ではない。それには、それ相応の仕組みが存在しているように思われる。現代宗教学において、アメリカという国家とその宗教性との関わりについては多くの研究がなされているが、とくにこの問題に関連すると思われるのは、「市民宗教」論である。つまり、「アメリカ人になる」（＝アメリカ人としての自己意識を獲得し他からアメリカ人として承認される）には、アメリカの建国神話とそれに表現された価値体系を内面化する必要があるが、この価値体系の担っているのが、市民宗教と呼ばれるものなのである。

15. 古代イスラエル民族との比較によって説明すると、次のようになる。

	聖なる出来事	英雄	神話	祭・儀礼	民族の理念
古代イスラエル	アブラハム契約 出エジプト	アブラハム モーセ	旧約聖書の民族起源神話	三大祭り	契約の民 選民
アメリカ	独立戦争、南北戦争、メイフラワー号	ワシントン リンカーン	合衆国憲法 歴史教科書	独立記念日など	神の下なる国家、自由と民主主義

16. アメリカとキリスト教

アメリカはキリスト教国か？　問題は、アメリカの市民宗教とキリスト教との関係であり、これを正確に理解するには、かなり精密な議論が必要になる。それは、最近のクリスマス論争（"Merry Chirstmas!" か、 "Happy Holidays!" か）からもわかるであろう。

結論的に言えば、アメリカの市民宗教を構成する具体的な象徴体系は、キリスト教的な象徴体系を大幅に借用することによって成立しており、外見的には両者は重なって見

える――アメリカ人的な行動のパターンとしての「日曜日、礼拝に出席する」ことの位置付け――。また、アメリカ人自身、明確に両者の区別を意識しているかは検討の余地があるだろう。しかし、「神」観念の中身を比較すればわかるように、両者の間には大きな相違も見られる。それは、僕の形をとって十字架上で死んだ神という神観念がアメリカの市民宗教では稀薄であるという点である。

この問題を論じるには、政治的民族的アイデンティティと宗教との関係についてのさらなる研究が必要になる。

＜参考文献＞

１．クルト・ヒュプナー　『神話の真理』法政大学出版会
２．小熊英二　『単一民族神話の起源　＜日本人＞の自画像の系譜』新曜社
３．小坂井敏晶　『民族という虚構』東京大学出版会
４．石田友雄　『ユダヤ教』山川出版社
５．マルティン・ノート　『イスラエル史』日本基督教団出版局
６．渡辺善太　『「出エジプト」以前』日本基督教団出版局
７．Ｈ．リングレン　『イスラエル宗教史』教文館
８．バートン・マック　『誰が新約聖書を書いたのか』青土社
９．秦　剛平　『乗っ取られた聖書』京都大学学術出版会
10. 芦名定道　「比較宗教と神話」（芦名定道編『比較宗教学への招待――東アジアの視点から』晃洋書房）
11. 今関恒夫他共著　『近代ヨーロッパの探求３　教会』ミネルヴァ書房
12. Ｒ．Ｎ．ベラー『社会変革と宗教倫理』未来社
13. 井門富士夫編　『アメリカの宗教的伝統と文化』玉川大学出版部
『多元社会の宗教集団』大明堂
『アメリカの宗教――多民族社会の世界観』弘文堂
14. 小川晃一・片山厚編『宗教とアメリカ』木鐸社
15. 森孝一　『宗教からよむ「アメリカ」』講談社
16. ピラード／リンダー　『アメリカの市民宗教と大統領』麗澤大学出版会
17. 山内昌之　『民族と国家――イスラム史の視角から』岩波新書